

松下幸之助の政治観

国家経営の基本理念



PHP総合研究所
松下理念研究部長
佐藤悌二郎

国家盛衰の力ギを握る政治

新しい日本の国家・国民の繁栄をどうすれば実現できるかを考えようと、昭和四十年から四十六年まで、月刊誌『PHP』に七十五回にわたって連載された「あたらしい日本・日本の繁栄譜」の「5 政治の理念・欲望を満たす政治」（昭和四十年六月号）のなかで、松下幸之助は、「国家国民の繁栄、平和、幸福を生み出していく最も中心となるものは政治だ」と述べ、「極論すれば、政治は国家盛衰の力ギを握るものであって、それが適切に行われるか否かが、現実の国民生活の幸不幸を左右する。特に国家社会の規模が大きくなり、仕組みが複雑多岐にわたっていくこれからの社会においては、政治の使命、責任というものは、ますます重

ければならないと考えていた。

したがって、ここからも容易に推測できるように、松下の政治に対する考え方なりさまざまな提言は、松下自身の長年にわたる事業経営の体験と思索のなかから形づくられた経営理念や経営手法から発想されたものが多い。例えば、松下が唱えた「道州制」「北海道独立論」は、松下の代表的な経営理念の一つである。「自主責任経営」の考え方をベースにしたものといえようし、「無税国家構想」も企業会計の導入を企図したものである。あるいは政治すなわち国家経営においては、まず何よりも基本理念の確立が大切だとしていることもその現われといえよう。松下は、企業経営を進める上で最も大切なこととして、何のために経営を行うのか、どのように経営を行っていくのかという経営理念をしっかりと確立することをあげているが、政治においても、やはりまず国家経営の基本理念、基本方針の確立が大切だと考えていた。

理念は、ちょうど航海をする際の目標のようなものである。航海をするときには、まず船を出す目的に従って、いつまでどこへ行くことという目標を立てる。そして、その目標に照らして航海の日程を組んでいくわけである。海へ乗り出したものの、西へ行くのか東へ行くのかはつきりしないというのでは、どの方向に舵を取ってよいかわからない。政治もこれと同じで、政治の基本理念を正しく明確に打ち出すことが国を運営していく上できわめて大切であり、そうでなければ、真の繁栄を生む力強い政治は決して生まれてこないというのである。

特に松下は、日本の戦後政治の混乱混乱は、そうした国家経営の明確な理念、基本方針がないところにあると考え、国家経営の

かつ大になってくるといわねばなるまい」といつている。

ここにあるように、松下は、政治をきわめて大事なものと考え、政治がお互いの国民生活にとっていかに大切かということを繰り返し世に訴えていた。第二次大戦後にPHP研究所を創設したのも、当時の政治に対する公憤が一つの動機であった。敗戦後の食べるに食糧がなく、住むに家がないという状況を目の当たりにして、また、あまりにも非効率で人情の機微を無視した政治が行われている姿を見て、松下は、「国民活動のすべてに影響を及ぼす政治が安定し、よくなるなければ、まともな企業活動もできないし、国民の幸せもない。政治をしっかりとしたものにするためには、産業人といえども一国民として政治に対して提言をしていかなければならない」と考え、以後、政治に対してさまざまな提言を重ねてきたのである。

では、政治とはどういふものであり、どのような理念によって国家は運営されねばならないと松下は考えていたのであるのか。本稿では、松下の政治に関する発言やさまざまな提言の根底にある考え、特に松下が政治の目的、政治の要諦をどう考えていたのかといった政治の基本理念・政治観について概観してみたい。

政治は「国家経営」である

まず、松下の政治に対する見方で特徴的だと思われるのは、政治を「経営」と捉えていたことである。松下は、小は個々人の人から、大は国家の政治まで、およそ目標、計画を立てて行う活動はすべて経営と見ており、政治は国家国民を対象にした経営活動、すなわち「国家経営」であり、真の政治は真の国家経営である。松下の政治に対する見方で特徴的だと思われるのは、政治を「経営」と捉えていたことである。松下は、小は個々人の人から、大は国家の政治まで、およそ目標、計画を立てて行う活動はすべて経営と見ており、政治は国家国民を対象にした経営活動、すなわち「国家経営」であり、真の政治は真の国家経営である。松下の繁栄譜17「国是が忘れられている」（昭和四十一年六月号）。

人間の欲望を適正に満たす政治

では、政治すなわち国家経営の基本理念、基本方針を、松下はどのように考えていたのであるのか。まず、何のためにこの国を経営するのかという政治の目的について、松下は次のようにいつている。

「政治の究極の目的は人々の幸せをもたらすためというか、すべての人がいきいきと仕事に励み、生活を楽しむことのできる社会をつくることにある。いいかえれば、国民の繁栄、平和、幸福をもたらすために政治が行われる」

そして、そうした政治の目的はどのようにすれば達成できるのかということについて松下は、「欲望が適正に満たされることだ」といつ。

人間にはいろいろな欲望がある。食欲や性欲などの本能的な欲望もあれば、名誉欲や知識欲といった精神的な欲望もある。あるいは、こういう仕事をして自分を生かしたいというような欲望もある。そういう諸々の欲望を満たしたいという思いから、さまざまな営みがなされているわけである。もし欲望というものがまったくなかったならば、この世の中には何の活動も起こってこないであろう。その意味で、欲望はすべての人間活動の源泉であり原動力だといつてもよい。しかも、この欲望は人間みずからがつく

り出したものではなく、いわば自然のうちに人間に備わった天与のものである。

したがってわれわれは、これを無視したり軽視したりするのはなく、むしろ素直に認め、適正に満たし伸ばしていかなければならない。それが人間の本性を生かす素直な行き方であり、そういうことを基本理念とした、そういう方向をめざした政治でなければ、真の繁栄、平和、幸福は生まれてこない、松下は考えていたのである。

自由と秩序と生成発展のある姿をめざす

では、お互いの欲望がそれぞれに満たされるためには何が必要なのか。それについて松下は、まず何といつても心身ともに大幅な自由が許されていることを第一の条件としてあげる。自分のやりたいことが自由にやれてこそ、欲望が満たされるというわけである。

しかし、いくら自由が大切といつても、各人が自分勝手な行動をして他人の自由を妨げたり、それによって世の中が混乱してしまつては、思うような活動ができなくなり、結局お互いの欲望は満たされなくなる。だから、お互いの欲望が適正に満たされるには、社会全体として一つのピシツとした秩序が保たれ、その秩序に従いつつお互いに協力をして生活を営んでいくことが肝要になる。すなわち、広い自由とともに高い秩序がなければならぬのである。この高い秩序のあることが第二の条件だといふ。

そしてもう一つあげているのが生成発展である。欲望が適正に満たされるためには、お互いの生活に役立ついろいろな文化、文ければならない。職種がたくさんあつて、万人がそれぞれところを得てこそ、働きがいや働く喜びが生まれ、また仕事の能率も上がり、ひいてはそれが社会の進歩発展、文化の向上に資することにもなるのである。

しからば、どうすれば職種が増えるのか。ここで、さきにあげた広い自由と高い秩序と限らない生成発展が必要になってくるのである。自由と秩序と生成発展とが併行して高まつている社会になれば、おのずと職種も増え、万人がところを得る、つまり適材が適所に就きやすくなるというわけである。

よつて、職種を増やしていくことを十分考慮した政治を行うことが肝要であり、そのように「お互いの欲望が適正に満たされる」ということ、いいかえれば、自由と秩序と生成発展の度合いがそれぞれ高い社会、そして職種が多くて、万人がところを得てのびのびと働くことができる社会」が政治のめざす姿だと松下は考えていたのである。

国を支える三本の柱

では、どうすれば、自由でしかも秩序が整然とした繁栄の社会を築くことができるのか。それについて松下は、政治的にさまざまな配慮なり施策が必要だとしているが、なかでも特に重視すべきものとして、「治安」と「遵法」と「自衛」の三つをあげている。

すなわち、治安が乱れれば、犯罪や事故が多くなつて、国民は生活の各面で要らぬ心配をしなければならぬし、直接の被害を受けかねない。それでは人々の活動意欲も減退して、生産性が低

物が絶えず創造され、発展していかなければならないということである。

このように松下は、人間の欲望を適正に満たす政治とは、この三つの条件、広い自由と高い秩序と限らない生成発展とが相互にバランスがとれて生み出されていく政治のことだと考え、この三つを政治がめざさなくてはならないものとしてあげている。自由と秩序と生成発展の三つが併行して高まつている社会でなければ、お互いの欲望を真に適正に満たすことはむずかしいし、国家国民の繁栄、平和、幸福をスムーズにもたらすこともできないというのである。

職種が増え、万人がところを得る政治

それでは、お互いの欲望がそれぞれ適正に満たされた状況や社会について、具体的にどのような姿を松下は思い描いていたのであろうか。それは、例えばそれぞれの天分を生かした働きが自由自在にできる状況、いいかえれば、職種がたくさんあつて、自分に適した職業に就きやすい社会である。

あらためていうまでもなく、われわれが社会生活を営んでいくための基本的な活動は、働く場をもち、仕事をすることである。ただ、その場合に、どういう仕事に就くかが問題となる。というのは、人間はそれぞれ顔かたちが違つごとく、みな性格、考え、知恵、才能を異にしている。万人が万人とも他と異なつた個性、適性をもち、欲望もまさに千差万別である。

したがつて、そのそれぞれの個性、適性にふさわしい仕事に就くことが大切であり、そのためには、職種がそれだけたくさん下するし、国民生活の各方面にいろいろなロスが生じてくる。したがつて、国家・社会を能率よく、しかもお互い国民の幸せに結びつくように運営するには、何よりも犯罪や事故をできるかぎり少なくし、秩序を高めて治安を保持しなければならぬ。この治安の保持こそ、政治における最重要事であり、古今東西に通じる政治の要諦、基盤だと松下はいつている。

そしてその治安を裏づけるものとしてあげているのが遵法、法を正しく守ることである。今日のわが国は、国民主権の民主主義体制下にある。その民主主義は、お互い国民がみずからのために定めた法律を互いに守り合うことで成り立っている。もしこれを無視したり軽視すれば、社会秩序は乱れ、民主主義は根本的に崩壊してしまふ。だから、定められた法律を尊び、厳守していく精神なり態度を、国民一人ひとりのうちに養っていくことが肝要であり、法律に対する正しい理解と遵法精神とを養いつつ、真の民主主義による繁栄国家を建設していかなければならないというのである。

そしてそのために大切なものとして、松下は幼いときからの教育をあげる。学校教育において良識を育てる徳育を十分に実施するとともに、家庭においても、幼児期から正しいしつけを行なつていく。そうした努力が積み重ねられていけば、やがて国民それぞれに、いわゆる「欲するままにして矩を躰えぬない」姿が増え、法律などを特に厳しくしなくても高い治安を生み出せるのではないかといつのである。

なお、後年、松下は、「法治国家は中進国だ」と主張するようになる。昔、中国の漢の高祖が、三つの条文だけの「法三章」と

いうものを定め、これに従って国を治めた結果、人々が喜び、国家が大いに興隆し、漢の治世の基礎が固まったという故事を引いて、政治の要諦は一面こういうところにあるのではないか、法律は最小限ですむのが理想であり、法三章でも栄える国が真の文化国家であり先進国である、法三章で栄える徳性国家、良識国家をめざそうと呼びかけている。

自由でしかも秩序が整然とした繁栄の社会を築く上で、松下がもう一つ重視していたのが自衛、国防である。国民が安心して暮らせるためには、国内の治安が正しく保持されているというだけでなく、外からの脅威に対する十分な備えも必要だというのが松下の考えであった。その意味で、松下にすれば、国防を他国にまかせ、防衛問題をなおざりにしているわが国の姿は、真の独立国家としての態度とはいえないものであった。一人前の独立国家であるなら、みずからの安全や生存はできるかぎり自身で守るよう心がけ、その上に立って、他国と協調しつつ世界の平和と繁栄を求めていくのが当然の姿ではないかというのが松下の思いだったのである。

その根拠の一つとして、松下は、自然界の姿をあげる。すなわち、自然界の生物には保護色というものがある。あるいは危険から逃れるさまざまな機能が備わっている。そのように、すべての生物はそれぞれに自衛力、自衛手段をもっている。これはいいかえれば、自然が万物にそのような自衛力を与えていると考えてよい。もちろんこれは人間においても同様であり、みずから守ることは自然の理法、天意にかなった人間として正しい当然の姿だと松下は考えたのである。

から生まれたものだといえるし、防衛に対する見方も、松下の自然の摂理に対する洞察が基になっている。

また、松下は、「PHPのことは政治の要諦」のなかで、「単に学問や才能だけに頼っていいは、よい政治はできない。為政者も民衆も素直な心で天地自然の理を仰ぎ、これに従って人々の幸福をはかってゆくところに政治の要諦がある」といつているが、これも、「この世には自然の理法というものが厳然と働いており、それは生成発展である」という松下の自然観からきているといえる。天地自然の理に従えば、政治はもとより、すべてがうまくいき、繁栄、平和、幸福が招来されるというのである。

あるいは、ここでは詳しく紹介できないが、松下の行なった個々の提言、例えば「道州制」や税制に対するさまざまな提言なども、それぞれ人間とはどういうものかということに対する洞察がやはり基本にあるといえよう。

このようにして、松下は、真に繁栄、平和、幸福を生む政治のあり方はどのようなものかということ、自分なりの人間や社会に対する洞察に立脚して素直に考え、政治の基本理念なり具体的提言を世に問うとともに、政府、為政者に対して、政治の基本理念、基本方針の確立と、それにもとづいた具体策を力強く講じていくよう要望してきたのである。

国民の程度に応じた政府しかもちえない

以上、松下の政治に関する発言やさまざまな提言の根底にある基本の理念・政治観について概観してみた。これまで見てきたような考え方をベースに、松下はさまざまな提言を行い、政治を論

いずれにせよ、このようにして社会の秩序が適切に保たれ、治安が正しく保持されたならば、人々は安心してみずからの仕事に精を出すことができ、枕を高くして眠ることができる。そのように自由に活動しやすい世の中をつくってこそ、国民お互いの持ち味が十二分に発揮され、そこにいきいきとした発展の姿が生まれ、繁栄がもたらされてくるというわけである。

人間観、社会観、自然観が根底に

ところで、松下が企業経営において経営理念を確立することの大切さを強く説いていたことはさきに述べたが、松下が経営理念の大切さを説くとき、併せて強調していたのは、経営理念はそれぞれの経営者の人生観、人間観、社会観、世界観といったものに根差したものでなければならぬということであった。これは、政治が国家経営である以上、そのまま政治にも当てはまるといえよう。すなわち政治の基本理念、基本方針もやはり、人間とはどのようなものか、社会はどのようなものか、あるいはどうあるべきかといった人間観や社会観、世界観を基礎にして打ち立てられてこそ、真に正しい政治理念たりるのである。その点、松下の政治に対する考えや提言も、まさにそうした人間や人生や自然に対する洞察と理解から生まれたものであったといえよう。

例えば、さきに見た「すべての人がいきいきと仕事に励み、生活を楽しむことのできる社会をつくる」という政治の目的に対する考え方は、自分の適性に合った仕事に就いて天分を自由に存分に発揮し、欲望が満たされることが人間としての幸せであり、社会の繁栄、発展をもたらす基となるという松下の人生観、人間観じてきたのである。それらの個々の提言内容については、ぜひ松下の著書を読んでもらいたいと思うが、最後に一つ、松下が繰り返し主張していたことを紹介して、本稿の結びとしたい。

それは「主権者はあくまで国民だ」ということである。松下は、政府、為政者に対してさまざまな要望を寄せ、苦言を呈してきたが、その一方で、国民の政治意識の低さ、主権者意識の希薄さを嘆じ、主権者としての自覚を促してきた。それは、民主主義国家においては、国民一人ひとりがわが事として政治に関心を寄せることが何よりも大事であり、国民が政治を嘲笑しているかぎり、その嘲笑に値する政治しか行われぬし、国民はその程度に応じた政府しかもちえないという認識からであった。

かつて国会が論議の場というより、「鬪人場」の姿を呈していたころ、ある放送で「大きくなったら何になりたいか」と尋ねられた小学生が、「僕は喧嘩が弱いから政治家にはなれない」と無邪気に答えていたのを見た松下は、「これを笑って聞く者は、自分で自分の幸福を葬っているものだ。政治という仕事が軽視され、政治家が尊敬をうけないような国が、繁栄するはずがない」と感じ、この責任は誰にあるのか、選んだ国民の側にあるのか、選ばれた政治家の側にあるのかと問いかけていた。

そのように、松下は、日本の政治と政治家、そして国民の姿に苛立ちを感じながらも、二十一世紀において、確固たる政治の基本理念、基本方針のもとに国民がいきいきと活動し、生活を楽しんでいる姿を思い描き、その実現を願って、その生涯を終えるまで提言し、警鐘を鳴らし続けたのである。